

(3) 第2・3層出土土器

鉢・皿形土器・注口土器があり、その器形や文様からみて一迫町山王遺跡(伊東・須藤:1985)などに類例が求められ、晩期中葉・大洞C2式に位置付けられる。しかし、未だ羊歯状文の名残りを留める鉢形土器(第11図9、16,17)や皿(第11図40)などは、より大洞C1式に近い特徴を残している。

(4) 第1層(表土)・A区出土土器

前述した第5～2層にみられない土器をA～Dとした。文様の特徴からみて、これらは次の土器型式に比定される。

A:後期「宝ヶ峯式」、B・C:晩期「大洞B式・大洞B-C式」、D:中期「大木9式」

B 食料の獲得

ここでは、まず最初に畑中貝塚周辺の現地形を外観することにし、その後で、縄文時代後期～晩期における地形を復元し、食料を採集した場所について考える。

現在の地形(第19図)

畑中貝塚の西には200m級の山から成る亘理地壘山地が槻木まで南北に走っている。東は貝塚から6kmいくと太平洋になる。阿武隈山地に端を発している阿武隈川は、亘理地壘山地の西麓に沿って流れていて、これが途切れる槻木で東に大きく流れを変えて太平洋に注いでいる。阿武隈川流域では兩岸に自然堤防が発達している。また太平洋岸では海岸線に沿って浜堤が数列みられる。最も内陸にあるのは、名取・岩沼・亘理へと続くもので、畑中貝塚の北で終わる。最も新しいのは現海岸線に沿って多賀城から亘理に至るまで連続している。

亘理付近の浜堤は、特に発達が著しく、内陸部と現海岸線にあるものの間に、さらに2～3列ほどある。中間と現海岸線に沿った浜堤は山元町では山地と接するため、なくなっている。

古地形の復元

阿武隈川が東に大きく曲がる、内陸部の柴田町槻木周辺には、早期後半から前期前半に作られた貝塚が6ヶ所知られている(芳賀:1983)。どの貝塚も早期後半ではハマグリ、前期前半ではヤマトシジミを主体としており、主要な貝が時期によって違っている。前期になると槻木周辺では、環境に変化があったようで、これは早期後半の時代には旧槻木湾(斎藤:1981)として、内湾化していたのが、前期前半では阿武隈川によって形成された自然堤防によって湾口がふさがれ、潟湖化したことを示している。

この自然堤防と、海岸部の沖積地の最も内側にある浜堤は近接していることから、浜堤は前期の海岸に沿っていると考えられる。発達した浜堤上には縄文時代の遺跡が多く、これらの浜堤がいつごろ形成されたのかよくわからないが、いちばん外側の浜堤は現在の海岸線によ

て形成されたものであるから、縄文時代後期から晩期の海岸線は、畑中貝塚の東にある中間の浜堤群のいずれかに沿っていたといえよう。

以上のことをふまえて、畑中貝塚が形成された頃の地形を推定してみると、西は亘理地壘山地、北は阿武隈川右岸の自然堤防、東は浜堤、南は地壘山地と浜堤が近接していた状況が考えられる。つまり、現在の地名でみると、亘理 - 今泉 - 荒浜 - 長瀬 - 山下 - 亘理を結ぶ地域に、旧亘理・山元潟とも呼べるような広大な潟湖が形成されていたようである。この潟湖は、湾の入口がふさがれてできたものではなく、陸と海による土砂の堆積作用によって形成された地形である点で、縄文時代前期に成立していた旧槻木潟とは異なる。

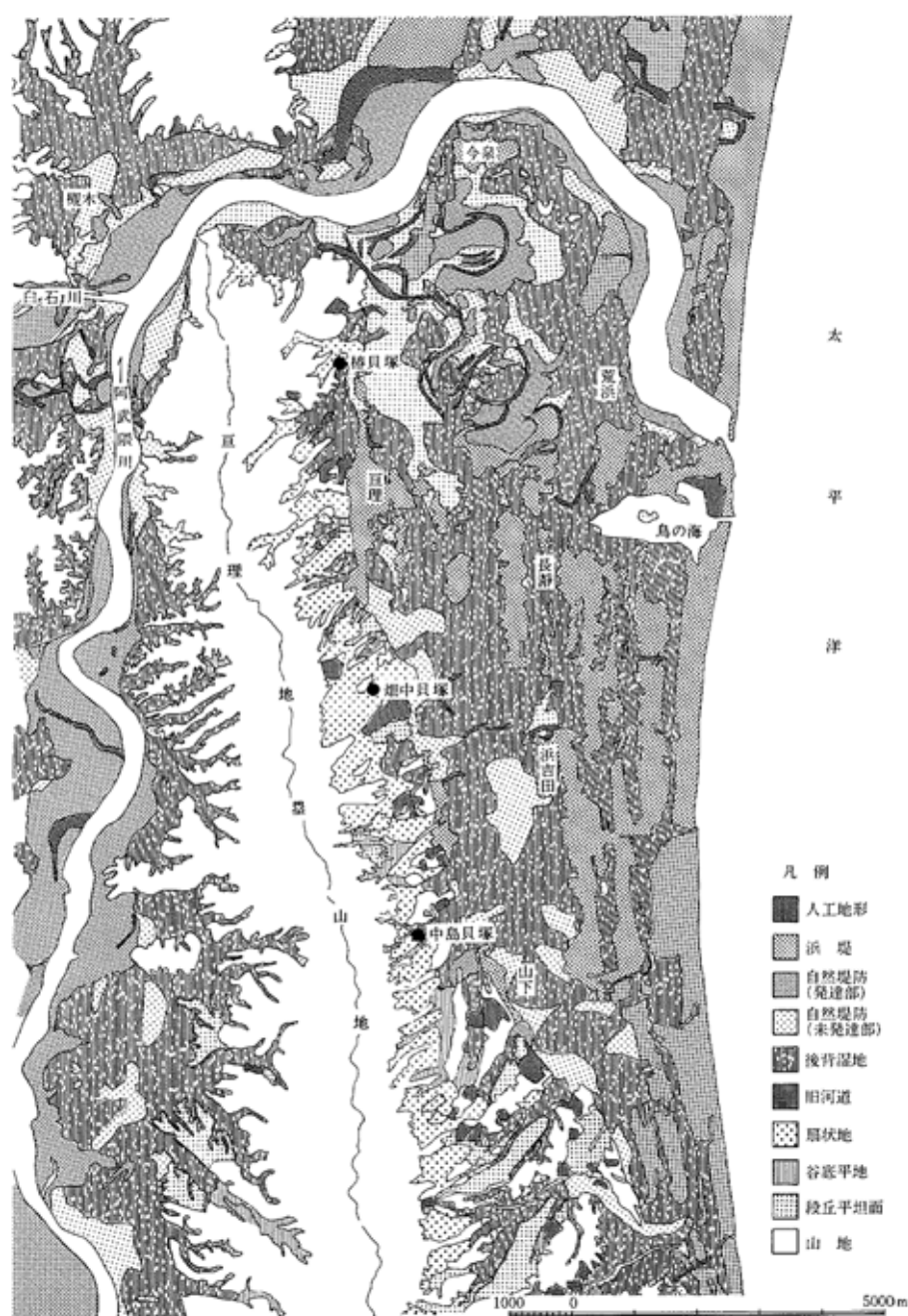
生活の場

畑中貝塚から出土している自然遺物は、前節で復元した環境内でとられている。すなわち、哺乳類は亘理地壘山地、ヤマトシジミは旧亘理・山元潟、コイ科魚類は地壘山地から潟湖に注いでいる河川で捕獲されていたよう。また若干出土している、沿岸砂底に生息するチョウセンハマグリ、ダイベイキサゴ、ウバガイ、コタマガイは浜堤の東まで出かける機会があったことを示している。また、貝塚周辺や山地では堅果類をはじめとする植物質食料も多く取られていよう。

ヤマトシジミは殻高 3cm 前後の大きさのものが多く、1 mm の篩には殻高 1cm に満たないものも目立っている。このことから、1 個 1 個採集したのではなく、カゴのようなもので泥ごとすくって取っていたとも考えられる。

コイ科魚類の咽頭歯では截頂形をしたものが多いことからフナが多く取られていたことがわかる。現生フナ(体長 10.0cm)の咽頭骨より小さいものが大部分である。これらは、大きさからみて釣ったのではなく、網ですくったのであろう。

骨角器では鈎の可能性のあるもの(第 16 図 11)や彎曲刺突具の可能性のあるもの(第 16 図 7)が出土しているが、数は多くない。近くに所在する椿貝塚や中島貝塚でも同じ傾向にある。漁具と推定される骨角器が少ないことは、刺突や釣りによる漁法は畑中貝塚を代表する捕獲法でないことを示している。同じ頃、松島湾周辺では燕形離頭鈎や釣針が著しく発達している。この違いは、広大な潟湖を生活の基盤とする生態系(畑中貝塚・椿貝塚・中島貝塚)と魚類が豊富な内湾を生活の場としている生態系(松島湾周辺の貝塚)の違いを反映しているのだろう。



第19図 遼跡周辺の微地形区分図(宮城県：1985より)

引用・参考文献

- 我孫子 昭 二(1969)：「東北地方における縄文時代後期後半の土器型式 - 所謂『コブ付土器』の編年 - 」『石器時代9』
- 伊 東 信 雄(1957)：「宮城県古代史」『宮城県史1』
- 伊東信雄・須藤隆(1985)：『山王岡遺跡調査図録』一迫町教育委員会
- 井 関 広太郎(1983)：『沖積平野』東大出版会
- 内田要・内田清之助・内田享(1965)：『新日本動物図鑑(中)(下)』北隆館
- 金 子 浩 昌(1984)：『貝塚の獣骨の知識』東京美術
- 吉 良 哲 明(1954)：『原色日本貝類図鑑』保育社
- 草間俊一・金子浩昌編(1971)：『貝鳥貝塚 - 第4次調査報告 - 』岩手県花泉町教育委員会
- 後 藤 勝 彦(1956)：「宮城県宮古島里浜台囲貝塚の研究」『宮城県の地理と歴史1』
- 後 藤 勝 彦(1960)：「宮城県名取市高館金剛寺貝塚出土縄文式土器の研究」『宮城県の地理と歴史2』
- 後 藤 勝 彦(1962)：「陸前宮古島里浜台囲貝塚出土の土器について - 陸前地方後期縄文式文化の編年の研究 - 」『考古学雑誌48 - 1』
- 小井川 和 夫(1980)：「宮古島台囲貝塚出土の縄文後期末・晩期初頭の土器」『宮城史学7』
- 斎 藤 良 治(1960)：「宮城県鳴瀬町宮戸台囲貝塚の研究 - 昭和30年度Cトレンチ - 」『宮城県の地理と歴史2』
- 斎 藤 良 治(1968)：「陸前地方縄文文化後期後半の土器編年について - 宮戸台囲貝塚及び西ノ浜貝塚出土の土器を中心として」『宮城県の地理と歴史3』
- 斎 藤 良 治(1981)：「槻木貝塚群」『広域遺跡保存対策調査研究報告4』文化庁
- 志 間 泰 治(1960)：「丸森町清水遺跡の調査」『宮城県の地理と歴史2』
- 志 間 泰 治(1975)：『亘理町史 上』
- 田 崎 敬 修(1971)：「沖積世における海面変化(高度時期)について - 東南部太平洋岸(岩沼・相馬・原町) - 」『福島考古12』
- 手 塚 均 他(1986)：「田柄貝塚」『宮城県文化財調査報告書111集』
- 富 永 盛治朗(1963)：『五百種魚体解剖図説(1)』角川書店
- 波 部 忠 重(1961)：『続原色日本貝類図鑑』保育社
- 林 謙 作(1984)：「宮城県下の貝塚群」『宮城の研究1 考古学篇』清文堂
- 芳 賀 寿 幸(1983)：『柴田町史 資料篇1』
- 藤 沼 邦 彦(1981)：「東北地方」『縄文土器大成4 晩期』雄山閣
- 槇 要 照(1968)：「陸前宮古島に於ける縄文後期末遺物の研究 - 台囲出土の土器についての一考察」『宮城県の地理と歴史3』
- 松 本 秀 明(1984)：「沖積平野の形成過程からみた過去一万年間の海岸変化」『宮城の研究1 考古学篇』清文堂

- 宮 城 県（1985）：『宮城県地震地盤図作製調査報告書』
- 宮城県教育委員会（1981）：「宮城県遺跡地図・宮城県遺跡地名表」『宮城県文化財調査報告書第73集』
- 山 内 清 男（1964）：「小川貝塚」『福島県史第6巻』
- 山 崎 京 美（1981）：「三貫地遺跡における動物遺体の研究」『三貫地遺跡 - 三貫地貝塚周辺における縄文後晩期遺跡の研究』